

合唱活動推進のための授業を考える

——和歌山県内合唱教育の現状把握を通して——

Proposal of Lessons to Promote Chorus Activities

——Through Current Situation Assessment of the Chorus Education in Wakayama Prefecture——

静 川 佳 恵

Kae SHIZUKAWA

(和歌山市立楠見西小学校)

嶋 田 由 美

Yumi SHIMADA

(和歌山大学教育学部)

2008年10月3日受理

1. はじめに

戦後の和歌山県内における音楽教育の動向の一つの特徴として、合唱教育の衰退が挙げられる。かつては合唱王国とまで言われた本県において、昨今、コンクールへの参加校が極めて少なく、また毎年参加校が限定されていることから、その動向が顕著である。校内に合唱部が存在していたとしても、実際には人数の問題などで充実した合唱活動が行いにくい状況でもある。

しかし合唱活動は、集団で行う音楽活動ならではのハーモニー感を味わえる活動であり、学校生活で体験した合唱活動の楽しさは、生涯にわたる各個の音楽活動の礎を築くものとなり得るものである。それ故、音楽教育の早い段階から、継続的な指導が必要であると考え。そのためには、課外活動としての合唱活動の前に、音楽科の活動内容として、小学校中学年からの合唱指導が望まれる。

本研究はこのような課題意識から、県内における合唱活動の現状を把握し、その考察にたつて、小学校中学年からの声を重ねる指導の在り方を検討し、一つの授業提案を行うものである。

2. 和歌山県内青少年の合唱活動の変遷

ー県内実施合唱コンクールの概要と

参加校の推移ー

和歌山県で行われている合唱コンクールは、NHK全国学校音楽コンクール、MBSこども音楽コンクール、和歌山県合唱コンクール(全日本合唱コンクール予選)の3つである。コンクール参加は、合唱活動への動機付けの一つとなり、またコンクール自体の盛衰を見ることは合唱活動全体の動向を知る手がかりとなると考えられる。そこで、本項ではまず、上記の3種のコンクールを中心に、これらのコンクールの特色や近年のコンクール参加状況を調査し、本研究のための基礎的資料を得ることとする。

2.1. NHK全国学校音楽コンクール

〈概要¹⁾〉

1) 主催

NHK和歌山放送局、全日本音楽教育研究会、日本教育音楽協会、和歌山県音楽教育連盟、和歌山県高等学校文化連盟合唱部会

2) 後援

文部科学省、全国放送教育研究会連盟、和歌山県教育委員会、和歌山県合唱連盟、NHKサービスセンター

3) 参加規定

◇参加資格◇

小学校児童ならびに中学校、高等学校生徒。同一の学校から一団体のみの参加。2校合同での参加可能。〈以下省略〉

◇出演者人数◇

小学校・中学校の部 35人以内 高等学校の部 40人以内 〈以下省略〉

NHK全国学校音楽コンクールの県大会への出場校は、近年、各校種ともに4～5校の校数で推移している。小学校は2006年度以降、田辺市内4校のみ、また中学校においても2005年度以降は、和歌山市内4校と田辺市内1校が参加しているのみである。

2.2. MBSこども音楽コンクール

〈概要²⁾〉

1) 主催

毎日放送

2) 後援

文部科学省、和歌山県教育委員会、毎日新聞社

3) 参加規定

◇参加資格◇

小学校児童、中学校生徒(学年、クラス、クラブ、その他学校単位のグループであればどのような形態でも出場可能。)〈中略〉学校の所在地に関わらず、どこの地区大会にも出場可能。

◇出演区分・出演人数◇

小学校／重唱部門／指揮のない1パート1名で、
2～8名以内 合唱部門／1パート2名以上であれば人数制限なし。

中学校／重唱部門、合唱部門、上に同じ。

〈以下省略〉

本コンクールの近年の参加状況に関しては、主催者に問い合わせをしたが情報公開が難しいとの回答であった。しかし、西日本大会への出場校は1990年代以降、小学校は田辺市内の小学校、また中学校も新宮、田辺、及び和歌山市内の特定の中学校に限られている³⁾。

2.3. 和歌山県合唱コンクール

〈概要⁴⁾〉

1) 主催

全日本合唱連盟、朝日新聞社、和歌山県合唱連盟

2) 参加規定

◇参加資格◇

全日本合唱連盟に所属する各都道府県合唱連盟に加盟している合唱団。同一中学校・高等学校に在籍する生徒で編成する合唱団。〈以下省略〉

◇出演区分・出演人数◇

中学校部門混声合唱の部／8名以上 中学校部門
同声合唱の部／8名以上

高等学校部門Aグループ(小編成の部)／8名以上
32名以下

高等学校部門Bグループ(大編成の部)／33名以上

〈以下省略〉

和歌山県合唱コンクール(全日本合唱コンクール全国大会予選)に関しては、「和歌山県合唱連盟に加盟しなければコンクールに出場することはできない」となっており、和歌山県内の中学校や高等学校の場合、殆どの学校が和歌山県合唱連盟に加盟しておらず、その結果、このコンクールには参加できない状況である。

上記の各コンクールの参加資格を見ると、一つの学校だけではなく、複数校で合同の合唱団を作ることや、学校の所在地以外での参加も可能にするなど、できるだけ多くの学校が参加できるように配慮されている。しかし、それにもかかわらず、近年のごく限られた学校しか参加できていない状況に、県内の合唱教育の現状が反映されている。

3. 学校教育での合唱活動の実態

3.1. 県内の小学校・中学校・高等学校の実態

－アンケート調査から－

子ども達が合唱に出会うきっかけは、ほとんどの場合、学校の音楽の授業を通してであると考えられる。そこで本研究では、子ども達の音楽活動の基盤とも言える学校現場で、現在どういった合唱教育が行われているかを知るため、和歌山県内の小学校・中学校・高等学校の音楽の先生を対象にアンケートを試みた。

アンケートは2007年6～7月に和歌山県下の小中高等学校を対象として郵送による質問紙調査の方法で行った。回収率は、小学校が288校中120校で約42%、中学校は144校中41校で約28%、高等学校は48校中18校で約38%であった。

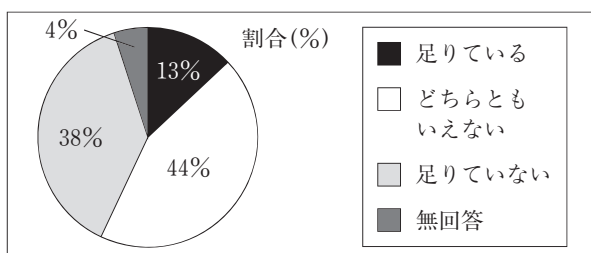
実施したアンケート結果のうち、いくつかの注目すべき回答を得ることができたので、そのうち7項目について、小中学校を対象として以下に考察を加える。

まず、授業数に関する質問項目1と項目2についてであるが、項目1「一年を通して、音楽の時間内で歌唱指導にかける時間はどれくらいですか?」という問いでは、小学校・中学校では、ともに6割以上の時間をかけている学校が多いという結果を得ることができた。しかし、項目2「歌唱指導のうち、合唱指導をするのに授業時数がたりていると思われませんか?」という質問では、小学校・中学校ともに、「足りていない」

表1) 項目2「歌唱指導のうち、合唱指導をするのに授業時数がたりていると思われませんか?」

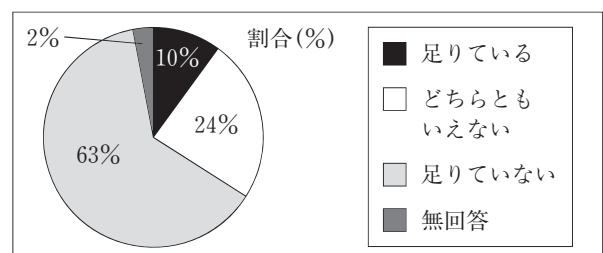
○小学校

	回答数	割合(%)
足りている	16	13%
どちらともいえない	53	44%
足りていない	46	38%
無回答	5	4%
計	120	100%



○中学校

	回答数	割合(%)
足りている	4	10%
どちらともいえない	10	24%
足りていない	26	63%
無回答	1	2%
計	41	100%



という回答が「足りている」を上回っていた(表1)。即ち、音楽の授業で、歌唱指導に半分以上の時間を割いているにもかかわらず、全体として合唱指導の時間が足りないと感じている先生が多いようであるが、これは合唱を仕上げるための十分な時間がないという現状を物語っているのではないかと思う。この背景には、音楽の授業時間数の削減が関係していると考ええる。

次に、合唱指導の中の子ども達の活動の時間的配分についての質問、項目7「合唱指導で音楽的な要素として、一番大事にしていることは何ですか?」という問いに対して、小学校・中学校・高等学校で多少の違いはあったものの、「ハーモニーを感じる」という項目が高い割合を占めていた。それに対し、アンケート項目8「実際の合唱指導で一番時間を要していることは何ですか?」という問いに対する回答では、「音取り」の割合が圧倒的に高く、「和音の響きをたしかめる」という項目への回答は、ほとんどないという結果となった。合唱指導に際して、「ハーモニーを感じる」ということを大事にしたい」と教師は願ってはいるものの、実際にはハーモニーを感じさせる段階までには至らず、音取り段階に留まってしまっていることが多いという現状が見てとられる。

次に注目する項目は、アンケート項目9「現在、合唱指導をするにあたって、一番悩んでいることは何ですか?」という問いに対し、小学校・中学校では「学習時間が足りない」という回答が多かったということである。この結果は、「合唱指導で、教師が最も大事にしたいことは、ハーモニーを感じさせることだが、一番時間を要していることは音取りである」ということと、関連しているのではないかと考える。もう少し学

習時間に余裕があれば、ハーモニーを感じる指導にも時間を費やすことができるのかもしれないと考える。この項目では、もう一つ気になる点があった。それは、中学校・高等学校で、「生徒が声を出さない」という回答が高い割合を占めていたことである。年齢が上がるに連れ、どのように生徒に声を出させるかということも、難しい問題になってくるということがこの結果から読み取ることができる。

アンケート項目17-2)では「和歌山県の合唱活動が衰退してきてしまった原因は何だと考えられますか?」という問いに対する回答を自由記述の形態で得た。小学校・中学校・高等学校で共通して挙げられていた、現場の教師が考える和歌山県の合唱活動の衰退の原因は、①合唱を練習する時間がないこと、②合唱指導をできる指導者がいないこと、③時代が変化し、子ども達の周りの環境と子ども達自身が変わってしまったことの3つであった。このことから、現在の学校教育の現場というのは、一昔前に比べ、学校での合唱指導を通して、子ども達の合唱活動を活発にするには難しい状況となってしまっているということが明らかとなった。②の指導者がいないということと関連して、和歌山県では音楽専科の教員が配置されていない小学校も多く、また中学校など専科教員の場合にも講師の比率が高いため、継続的な指導ができないという意見も多く挙げられていた。中には、教諭の場合でも、合唱クラブとして子ども達を指導したいと考えていても、多忙さが原因でなかなか指導するのは難しいという意見もあった。このようなことから、たとえ教師に合唱活動の指導への熱意があったとしても、指導しやすい環境とはいいいない時代となっているのではないかと

資料1) アンケート項目17-2)「和歌山県の合唱活動が衰退してきてしまった原因は何だと考えられますか?」に対する先生方の意見

◇授業時数の削減◇
・学校での音楽授業減少に伴い、一曲に時間をかけて仕上げるのが、困難になってきたため、合唱経験が減ってきた。 ・授業時数確保のための行事等が少なくなり、合唱を発表する場や時間も少なくなっている。
◇教師の多忙◇
・教師の多忙化で、研修を受ける時間がなくなり、研修を受けるための出張も十分できないので、合唱を指導できる人がいなくなっています。
◇専科教員について◇
・非常勤講師が増えた。 ・日高地方は、少子化で、学級数が少なくなり、専科教員の数が減りました。学級担任の先生は、特に音楽だけに力を入れて指導できるわけではありません。
◇子ども達の変化◇
・子供たちの人数の減少。多様な習い事の広まり。 ・子供達の個人主義的なところ。
◇子ども達を取り巻く環境の変化◇
・歌以外の分野のレベル上達と興味及び分野が広がってきた。業界としてのポップスと合唱に距離感があるから。 ・吹奏楽はここ数年テレビで取り上げられたりして盛んになってきていると思う。その分合唱の方は衰退してきているかもしれない。

自由記述のママ

察する。資料1)に先生方から得た回答のうち、典型的なものをいくつか項目別に記載する。

最後に、授業内でのア・カペラ曲の取り扱い方についての質問項目5-2)の回答について考察する。筆者は、合唱の楽しみの一つは、自分達の声を重ね、きれいなハーモニーを生み出し、身体でそのハーモニーを感じる事だと考える。ハーモニーを感じるには、声のみで音の重なりをつくり出す、ア・カペラ曲や輪唱曲を用いることが、分かりやすくよい方法ではないかと考える。この点に関し、実際に音楽の指導を行っている先生方の考え方を把握するために、「ア・カペラの曲(楽器の伴奏を伴わない合唱曲、輪唱も含む)を取り扱っていますか?」という質問を行った。しかし、この問いに関しては表2)に示すように、県内の小中学校では、「取り扱っていない」という回答が大部分であるという結果となった。

取り扱わない理由として小学校では、「ア・カペラ曲を教材として扱おうと考えたことがなかったため」や「ア・カペラ曲は、子ども達に難しいと感じたため」という選択肢が選ばれる率が高かった。一方、中学校では、「ア・カペラ曲は完成するまで、時間がかかるため」や、「ア・カペラ曲は、子ども達に難しいと感じたため」との回答が多い結果となった。

この結果から、短時間で簡単にハーモニーを感じることでできる教材があれば、学校教育の現状の中でも合唱指導に有効に使われ得るのではないかと考える。

3.2. 教育現場の実態

ー合唱指導を推進してきた先生方への

インタビューを通してー

本研究の一環として、合唱活動が活発に行われていた頃にどのような合唱指導を行っていたのか、また現在も合唱活動を盛んに行っている田辺市の小学校ではどのような合唱指導が行われているのかを知るために、

これまで合唱活動を推進してきた小畑日出夫先生(インタビュー当時白浜町立田辺野井小学校)と切原清美先生(インタビュー当時田辺市立田辺第一小学校)にインタビューを行った。

小畑先生は、1980年代後半から田辺市立田辺第二小学校に赴任され、当時は活気がなくなっていた田辺第二小学校の合唱部を全国大会にまで出場できるような合唱団に発展させた先生である。現在も西牟婁地方音楽研究会会長として、子ども達の音楽活動を盛んにするために熱心に活動されている。

切原先生は、インタビュー当時、田辺市立田辺第一小学校で音楽専科として、また合唱部顧問として熱心に指導され、数々のコンクールで合唱部を優勝へ導くなど活躍されている先生である。

この2人の先生方へのインタビューの中から、両先生の合唱指導の方法や、現在の子どもの合唱活動の状況等についてのご意見を抜粋して以下にまとめる。

＜小畑日出夫先生へのインタビュー

ー田辺市立田辺第二小学校での合唱指導からー

インタビューは2007年10月25日の午後、白浜町立田辺野井小学校音楽室において行った。

①合唱指導でのポイント

＜合唱部での指導＞

1. 基礎を大事にする。

歌うときの姿勢や、頭声発声、腹式呼吸といった「歌う基礎」ができていることが大事なことである。特に小学校では、同声合唱であることを忘れてはいけない。同声とは、「同じ質の声で歌う」ということであり、声質をそろえる必要がある。声質をそろえなければ、美しいハーモニーは生まれない。

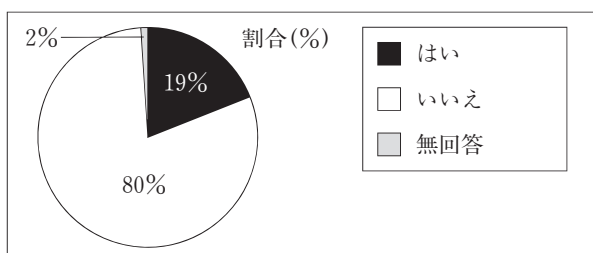
2. 内にこもらない教育を心がける。

教師だけの指導ではなく、外部の先生に来て頂き指導してもらうということを行った。また、児童を連れ

表2) 項目5-2)「ア・カペラの曲(楽器の伴奏を伴わない合唱曲、輪唱も含む)を取り扱っていますか?」

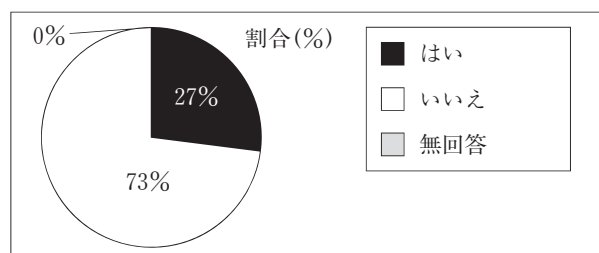
○小学校

	回答数	割合(%)
はい	23	19%
いいえ	95	80%
無回答	2	2%
計	120	100%



○中学校

	回答数	割合(%)
はい	11	27%
いいえ	30	73%
無回答	0	0%
計	41	100%



て東陽中学校や他の小学校へ合同練習に行くということもしていた。教師一人の指導だけではなく、他の先生の指導や、他の児童の演奏を聴き、子ども達に刺激を与えることが大切である。

〈授業での合唱指導〉

授業が子ども達の合唱活動の基礎となる。そのため発声や歌うときの姿勢は授業内でも指導する。合唱部の児童が、授業でも声を出して引っ張ってってくれるので、学校全体が合唱部のような声となっていた。

②当時の時代背景

時代的な流れから見ても、合唱をしたいという人が多かった。たくさんの学校がコンクールに出場して、学校どうして競い合うという風潮があったので、合唱活動も盛り上がりを見せていた。また、学校どうしがそういう様子だったので、子ども達も「他の学校に勝ちたい」という思いから自主的に朝練や放課後遅くまで練習するという状況が生まれた。また、コンクールに優勝することで、親も喜んで協力してくれていた。現在と違い、練習時間にもゆとりがあり、また治安もそこまで悪くなかったので、放課後遅くまで練習することができていた。そういう点では、当時は合唱活動が行いやすい環境であったのかもしれない。

③和歌山県内の合唱活動に活気がなくなってきた理由として考えられること

1. 合唱を教えることができる指導者がいない。
2. 治安が悪くなったり、家庭環境が変わったり、クラブ離れが多いなど、社会が変化してしまい、学校での合唱活動がしにくい状況となってきた。

〈切原清美先生へのインタビューから〉

インタビューは2007年12月24日の午後、田辺市立第一小学校保健室において行った。

①合唱指導でのポイント

〈合唱部での指導〉

最初のうちに何度も繰り返し、徹底的に音取りを済ませ、その後何度も練習する中で、音を重ねハーモニーを作っていく。音取りは、教師とピアニストの2人でパートごとに指導する。練習時間は、毎日昼休みの30分間。コンクールが近づくと、放課後約1時間の練習となる。また長期休暇時は、約2時間練習をし、身体づくり・発声に時間をかける。外部の先生を呼び、指導してもらうこともしている。

〈授業での合唱指導〉

「ハローハロー」でハーモニーを作り、「こんにやく体操」、発声、そして和音の響きを確認を感じる、という過程にノンストップで約10分を使い、発声と身体ほぐしの時間としている。また、歌唱指導ではピアノ伴奏はあまりせず、無伴奏で声の響きを聴くということを意識させるように指導している。

子ども達が音符や記号を読むことができるようにす

るために、6年生の3学期では毎回の授業で楽典の10問小テストを行っている。小テストだけでは知識段階に留まるため、発声の時にメゾフォルテ・ピアノ・クレシェンドなどの強弱記号を児童に見せ、それに合わせて声を出させるという取り組みもし、実践的に子ども達に楽典を身につけるように心がけている。

②保護者の方々との連携

コンクール出場の遠征費や、合唱部活動費など、育有会から援助金が出る。そのため、コンクールの遠征費用などには困っていない。また、田辺地方では児童の保護者が合唱経験者であったり、現在もなんらかの形で音楽に携わったりしている方が多いため、子ども達の合唱活動にも理解を示してくれ、積極的にサポートしてくれる。

③今の合唱活動の状況について

時代とともに子ども達が変わってきてしまって、昔のようにコンクールに向って燃えるという雰囲気がなくなっているように感じる。

2人の先生方へのインタビューから、合唱指導において、小学校では「歌う基礎」を身につけることが大事であるということが分かる。発声の基礎を指導しなければ、ハーモニーを感じさせることにも繋がらないのである。また、学校の音楽の授業での合唱指導が子ども達の合唱活動の土台となるため、授業で行う発声がいかに重要であるかということが分かる。このことから、田辺第一小学校で実践されていたように、授業の中に発声の部分の指導を毎回取り入れるということは、必要なことであると考えられる。

2人の先生方が考える合唱活動の衰退の原因としては、アンケートに回答頂いた先生方の意見にもあったように、時代の変化が大きいようである。しかし、たとえ時代が変化したとはいえ、合唱の楽しさというものは変わらないはずである。現に田辺地方では多くの子ども達が歌うことを楽しんでいる。時代の流れだからという理由で、合唱活動が衰退するのではなく、時代の変化に合わせて子ども達が合唱活動に取り組みやすい合唱指導の方法や、システム、環境を考え、整える必要があるのではないかと考える。

4. 合唱活動を推進させるための提案

合唱活動を推進させるために学校の授業ですべきことは、合唱の楽しみの一つである、「音をみんなで重ねハーモニーを生み出す喜び」を味わわせることではないかと考える。自分達が出した声が重なることで、きれいな一つの響きが生まれるということをもっと授業の中で体験する時間を増やすことが必要だと思う。

しかし、アンケート結果や、インタビューからも分かるように、現在の学校教育の現場というのは、時間にゆとりがなくなっており、ハーモニーを感じることに

資料2) 授業提案「小学校中学年におけるハーモニーを感じる指導—和歌山市立貴志小学校での実践より—」

〈対象学年〉

小学校3年生

〈題材名・教材名〉

きれいな歌声で輪唱しよう 「かっこう」(岡本敏明作詞/フランス曲)

CD『World Youth Choir disc 1/和歌山児童合唱団』

〈目標〉

- ・地声と頭声発声の違いに気づき、頭声発声で歌うことができる。
- ・他パートにつられず、しっかり歌うことができる。
- ・友達の声を聴きながら、輪唱することができる。
- ・友達の演奏に耳を傾け、自分なりの考えをもつことができる。

〈指導計画〉 全3時間

第1時 きれいな歌声で歌おう。

第2時 きれいな歌声で輪唱しよう。

第3時 友達の演奏に耳を傾け、ハーモニーを感じよう。

指導案 第3時

	学習活動	・教師の支援 ※留意点	準備物
導入 (10分)	○前回の復習 ○CDを聴く ○本時の課題 ハーモニーを感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいな歌声で輪唱をして、音を重ねたことを復習する。 <div>きれいな声で歌った合唱ってどんなのか聴いたことある？</div> <ul style="list-style-type: none"> ・CD(故郷/和歌山児童合唱団)をかける ・音が分かれたと思うところで手を挙げるように言う。 ・「ハーモニー」という言葉に触れる。 ・ハーモニーを感じて歌うと、合唱が上手になることを告げる。 	CD④
展開 (15分)	○ハンドサインを知る。 (ド・ソ・ミのみ)	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーモニーをきれいに響かせるには、ドレミのキャラクターを知っておく必要があることを告げる。 <div>ドレミにもみんなと同じようにキャラクターがあるって知っていたかな？</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ド→ソ→ミの順で教える。 ※それぞれの音のイメージをしっかりとつことを伝える。 ・前でハンドサインを示す。 ・ド→ソ→ミの順で音を重ねる。 ※入れ替わりで全員1回は響きを聴くことができるようにする。 	ハンドサインシート
(15分)	○「かっこう」を3声で輪唱する。 ○感想を書く	<ul style="list-style-type: none"> ・ドソミの響きが最後の音にあることを告げる。 ※最後の音をよく伸ばし、周りの音に耳を傾けるように言う。 ※互いに聴くことができるようにする。 ・3日間音楽の授業を受けて考えたこと・感じたこと・楽しかったことなどを記入する。 	ワークシート
まとめ (5分)	○今日の授業の振り返り	・ハンドサイン、ハーモニーを確認する	

資料3) 3時間の授業を終えての児童の感想(ワークシートへの児童の記述のママ)

1	さい後のドとソとミがそろった時とてもきれいなねいろでとてもひびいていたし、いろいろな音がまぜあわさり、それぞれの子がぜんりょくをつくして「きれいな声でできるだけより美しく歌おう。」という気持ちが一つになったからあんなきれいな声が出せたとはくは思います。
2	みんなのドソミって言うときめちゃくちゃひびいていました。すごく感どうしたし、すてきな声でした。いっかいかっこうをこれで歌いたいです。
3	ドソミとドドドと、ドソソの音のミとドとソがかさなってきれいだった。

に多くの時間を費やすことはできない状況にある。そのため、あまり時間をかけず、しかし、ハーモニーを感じることでできる教材が必要であると考え。

また、小学校高学年や中学生になってから「ハーモニーを感じる指導」を開始するのではなく、小学校中学年くらいから継続的に音を重ね、聴くという経験を積み重ねていくことによって、子ども達の中にも自然とハーモニー感が生まれるのではないかと考える。そこで、筆者は教育実習で試みた和歌山市立貴志小学校での指導実践を、小学校中学年におけるハーモニーを感じる指導として、提案したいと考える。資料2)に指導案を提示する。

資料2)に提示した授業を通して、小学校中学年からでも、模唱や実演を交えて指導することで、頭声発声と地声の違いに気づくことができ、またア・カペラで音を重ねることも可能であることが分かった。また、資料3)のワークシートの記述にみるように、何人かの児童には、和音がきれいに響いていると感じさせることができた。このことから、やはりハーモニーの美しさを体感するということは合唱の授業では非常に大事なことでないかと考える。

5. おわりに

時代が変化し、子ども達も変わっていく中で、合唱活動を盛んにするという事は難しいことであるが、そういう時代だから仕方がないとするのではなく、時代にあった合唱教育の在り方というものをもう一度考えていく必要があると考える。限られた時間の中でも、短い曲でハーモニーの楽しさを味わうことのできるような曲を選択し、小学校の段階から継続して指導していくことを提案したい。子ども達の合唱活動の土

台ともいえる音楽の授業の中で、少しでも子ども達の合唱活動の扉を開くことのできるような、「ハーモニーを感じ、合唱の楽しさを伝えられる授業」を行っていきたいと考える。

謝辞

本研究にあたって、和歌山市立貴志小学校の辻あゆみ先生に、授業実践を快く受け入れて頂き、また親身になってご指導して頂きました。また、お忙しい中アンケートにご協力下さった現場の先生方、とくに和歌山県の過去の合唱活動の様子についてお話を伺わせて頂いた、小畑日出夫先生には本当にお世話になりました。小畑先生のご紹介で、田辺市立田辺第一小学校の切原清美先生にも合唱指導の様子についてお話を伺うことができ、また合唱部の活動の様子も見学させて頂くことができました。先生方に深く感謝申し上げます。

註

- 1) NHK「第74回(平成19年度)NHK全国学校音楽コンクール参加規定」(<http://www.nhk.or.jp/event/oncon/2007.12.27>)より
- 2) MBS「平成19年度MBSこども音楽コンクール実施規定」(<http://www.mbs1179.com/kodomo/2007.12.27>)より
- 3) 山中陽子『八十万人の銀河 ―MBSこども音楽コンクール四十六年のあゆみ―』2000年 たまご書房参照
- 4) 和歌山県合唱コンクールは、全日本合唱コンクールの全国大会予選であり、和歌山県合唱コンクールは全日本合唱連盟が定めたコンクール規定にのっとって行われるため、和歌山県合唱連盟が新たにコンクール参加規程を定めてはいない。そのため、全日本合唱連盟「全日本合唱コンクール全国大会開催規定(2004)」(<http://www.jcanet.or.jp/jca/concour/conkitei.htm> 2007.12.27)参照